

第9回神奈川県国際芸術フェスティバル コンテンポラリー・アーツ・シリーズ  
**アール・ゾイド「メトロポリス」上映コンサート**  
 2002年11月2日(土) 神奈川県民ホール 大ホール

**アール・ゾイド**

原典 音楽監督: ジョーゼフ・ツルベク  
 制作: ジョーゼフ・ツルベク、パトリシア・ダリス、カスパー・ヴァック

ライブ演奏: アール・ゾイド  
 90分(ペトキオ・アム(キーボード、サンパノ)  
 ナビエ・ガブリエル(ボウ、パーカッション)  
 パトリシア・ダリス(キーボード、サンパノ)  
 ローランド・シムパニ(パーカッション)

演出: フリッツ・ラング  
 監督: フリッツ・ラング  
 原典: アルノ・ゾイド

ツアーマネージャー: モニク・クラウゼ  
 プロデューサー: シルヴァノ・カサリ

原典: 「メトロポリス」制作委員会(2001年、ドイツ)  
 (原典)「メトロポリス」制作委員会(1929年、ドイツ)

Metropolis cinema concert based on the restored version of Fritz Lang's Metropolis is a production by Art Zoyd. Centre Translatoire de Production et de Création Musicales avec le Sinfonietta Festival, Le Mariage Sacré Nationale, Maastricht, Le Théâtre d'Angoulême and L'Auditorium de Lyon. © Cinéma National de Lyon

Art Zoyd. Centre Translatoire de Production et de Création Musicales. Produced (co-financed) by the European Foundation Interreg with the support of the Ministère de la Culture. (DMC) Nord-Pas de Calais, the Conseil Régional du Nord-Pas de Calais, the Conseil Général du Nord, the Agglomération Maastricht - Université Nationale de Maastricht, the City of Maastricht

**Art Zoyd 'Metropolis' Live Concert**

Artistic Director: Gérard Houdebine  
 Original Score: Grand Houdebine, Patricia Dalo, Kaspe J. Teplitz

Live Music: Art Zoyd  
 Yuki Bekker-Hanata Keyboards/Samples  
 Didier Casamirca, Fabis, Percussions  
 Patricia Dalo, Anabanda, Percussions  
 Laurence Chau, Fais, Percussions

Stage Manager: Philippe Coupin  
 Sound: Xavier Boreaux  
 Technician: Alain Derriens

Tour Manager: Monique Vaillieu  
 Producer: Richard Castet

Film: Fritz Lang. The final new integral restored version of 2001

**メトロポリス Metropolis**

1926年ドイツ表現主義の映画監督フリッツ・ラングによって、感情の製作費と最高の特殊技術を駆使して製作されたサイレントムービー。古来社会を描いたSF映画の傑作として映画史にその名を残す。映画の中で描かれていた利権の競争を語る未来社会の姿は、現代の社会を予言しているかのようにある。現代の映画界を代表する「巨匠」ジョージ・ルーカス、スティーヴン・スピルバーグをはじめとする数々の映画監督に多大な影響を与えたSF映画の原点といえる作品。

**デジタル映像で甦った「メトロポリス」最終完全版**

「メトロポリス」オリジナルプリントは超巨大で存在しない。最も大規模にして4189m、当時の映写速度から推測しても2時間半を超える超巨大作として公開された作品であったが、その長さにより興行成績が伸び悩み、製作したワーナー社(現)は、普通規模のフィルムを3241mまで短縮して別の映画を製作し再公開した。この時期劇終したものの行方はわかっていない。同様にアメリカと他の外国輸出用プリントも、各国の事情に応じた編集と削除が行われ、それぞれ異なる「メトロポリス」になっていった。なお、1929年日本で公開されたものはアメリカで編集された「メトロポリス」であり、現在日本で最も流通しているビデオの上映時間は約95分である。これにより私達の知っている「メトロポリス」は、上映速度の関係し厳密ではないが、原則でも約1時間近く短縮されたものであることを意味している。

切り崩された「メトロポリス」の原形を取り戻すとする活動は以前から行われてきた。切り落とされた部分解や当時の資料収集が、世界規模で行われてきたのである。そうした結果、過去二つの修復版「メトロポリス」が製作されたが(72年と87年)、両作品共に修復の根拠に置く「原本」(ヴァージョン)の選択を誤っていたことが後の研究でわかり、その道を違うよう努力も無く結果的にオリジナルへ戻ることはならなかった。

それと「メトロポリス」の修復作業は続いた。そして最初の修復作品の発表から約30年経った2001年、ベルリンフィルムフェスティバルで、ついに数十年に及ぶ作業の集大成とも呼べる完全版「メトロポリス」が公開された。修復にあつたドイツのフィルム財団は、「原本」選びの慎重を期し、膨大な資料を読み込み、世界中に散逸したプリントを見比べ、このヴァージョンを完成させたのであった。集められた素材は全てデジタル処理された。その結果、傷や劣化は失せ、今までは暗く見えにくかったり潰れていたシーンも鮮明に現れた。輝き、彩り、美しさ、全てにおいて新しい生命を吹き込まれたかのような。日本では未見のシーンやカットもふんだんに盛り込まれている。1927年にアメリカにオリジナルプリントが存在しないので比較のしようはないが、それでもこのヴァージョンが推察する限り最もオリジナルに近いものであると言える。この修復版はスペインから「最終完全版」と認定され、アメリカに登録された。

※この解説文は、『映画』第66号(日本映画学会発行)に大沢真司氏が執筆された。  
 「メトロポリス」デジタル修復版の制作 - 第三回国際映画祭から - を再掲したものである。 文責: 山崎尚典芸術文化財団。

**「メトロポリス」あらすじ**

舞台は21世紀の未来都市・メトロポリス。立ち昇る高層ビル、繁栄を続ける機械文明、全てが光り輝いているかのようである。この都市を支配するのは、一大トラストを築いたヨー・フリーゼー。彼の一族は地上で楽園のような生活を送っている。一方、労働者は地下10階の工場へ押し込められ、終わることのない労働を強いられている。地上の繁栄と地下にあまりにも対照的である。そんな彼らの悲惨な生活にもつたつての希望がある。それは地下で被服車活動を行う美しい女性マリアの存在だ。彼女の説く信仰に、労働者は救いを思い出すのである。

ある日、フリーゼーの息子フリーデーが地下を訪れマリアと出会う。彼女の口から地下の労働者

者の実態を聞かされ、自分の一族が地下の人々に行きたくした仕打ちにフリーデーは衝撃を受ける。

その頃地上では、1人のマッドサイエニストがロボット(人造人間)を開発する。フリーゼーはロボットの脳をマリアとくっつけて作らせ、労働者の管理をさらに厳しくすることを思いつく。この作戦は失敗に終わった。フリーゼーの言葉を語るサイバーマリア(ロボットのマリア)、労働者は従ってゆくのであった。しかしロボットのマリアでは労働者の心を掴みきれず、やがてサイバーマリアの正体は暴れ、暴動も起こり、全ては崩壊へと向かい始める……。



**誠実な「不純」の楽しみ 大里俊時**

1980年代初頭、ある男が「メトロポリス」の版權を手に入れた。ドナ・サマーズの大ヒットをきっかけに作曲家・プロデューサーとして一世を風靡したジョージ・モロダーである。この版權をデヴィッド・ボウイと争って譲り落としたという彼は、手に入れた「メトロポリス」を、着色、インタビューなどの字幕化、そして各シーンにロックミュージックのオリジナルソングをつける等等の大胆なヴァージョンに仕立て上げ、一躍世間の注目を浴びることとなる。この版については、周知の通り、その「不純さ」ゆえ、大方の評論家が非難するが、さなければ黙殺したものであった。一方、筆者を含むある世代は、ともかくにも、これで初めて「メトロポリス」の面白さを知るという意思をこむったのである。

ここで今一度考えてみよう。モロダー版は、それほど劣悪なものだったのか。

例えば、筆者の手元にある廉価版(DVD)ヴァージョンには、モロダー版には存在しない冒頭のマラン・シモン、ヨシワタケンとの間の説明などが完全に省かれている。しかも、お手軽で「今風」のシンセ音楽がべたべたとかけられている。ほまだいいとしても、監督と主演以外のクレジットはどこにもなく、おまけに製作年まで間違えて記載されているのだ。これに比べたら、モロダー版のなんと誠実なことか。

これは、今日、映画が必ずしも映画館に足を運んで鑑賞されるべきものではない。むしろ、状況と関わって。言いかえれば、映画の鑑賞方法が劇々としてDVDなりを買って、自宅で鑑賞するという形態に重点を移しつつある現状を考えると、モロダー版にあった従つた欠点は問題とならなくなる。フリーデー・マリアに抱かれたられなくなった。単に3Dフィルムを絞ればよいのだし、着色された映像がいらない。モニターを白黒にすればす

む。また、さらに想像をたくましくして、仮にモロダー版が今DVDで発売されたらすれば、余計な字幕や追加された場面や文字(例えば「ヨシワタケ」というネオン)などは、鑑賞時に外せる(近い)オプションは持っていることだろう。いや、劣勢比較をしても何にもならないというの、別の見方もある。この作品が、その始めから、多くのカットを被り、多くの異なるヴァージョンが世界中に併存すること、少なくともモロダー版の公開時に広げられたことだ。さらに、研究者によれば、そもそもこの作品は、海外配給向けヴァージョンを容易に製作するために、同時に二台のカメラをまわして撮影されたものである。当然、各々のカメラの角度は微妙に違っている。今回我々が見るデジタル修復版も、それらの複数のフィルムから作成されているらしい。こう見ると、「メトロポリス」は、オリジナルの根本的な一性という基盤そのものが不安定なのだ。また、上映とともに見るなら、この作品は無声映画ではあるが、当時、上映とともに演奏されるべく、ゴットフリート・ハルツが伴奏音楽を書いている。余談だが、テア・ファン・ホルボウの原作を小説化した「メトロポリス」(改造社・昭和3年)の翻訳には、この業績が一枚掲載されている。もし、原理主義的に言ふなら、この映画はハルツの伴奏音楽とともに鑑賞されてこそ原典に忠実な鑑賞であり、無声で鑑賞するなどおかしな事とはならないだろう。

いや、筆者には、ここで追々弄弄して、原典に対するテキスト・クリティクスの重要性をいかにしろしようという意志は毛頭ない。言いたくはない。先述の廉価版DVDのごく情報を調べてしまうことは許し難いにしても、今やデジタル・テクノロジーによる取捨選択の自由がある限り、並立する情報を強引に唯一の版に統合する必要もなく(むしろ、映画館での上映形態が存在する限り、今回のように、可能限り正確な「原典版」が作られる必要性はなくなる)ならば、さらにその上に情報を付け加えていく(今は)たは、その整合性を十分に吟味された、という限定をつけるべきだろう。モロダー版の音や幾つかの場面は、確かにそれを欠いていた。仮にそれを「不純」と

呼ぶとしても、それが我々を思わぬ豊か体験へと導いてくれる契機にもなるだろう、ということなのだ。

さて、今回、我々は、かつて体験したことのない、映像と音との出会いに立ち会えることになる。昔、映像より75年ほど後に生れたものだ。映像は、そんなものとも出会えるなどは夢にも思わなかった。だが、安心させる。ここで音楽を担当するアール・ゾイドは、1976年の「ファースト・アルバム」以来今日まで、フランスのアヴァンギャルド・ロックの雄として君臨しつつあるグループであり、メンバーたちの音楽的教養と技術の高さは折り紙付きだ。さらに、80年代以降、彼らは、舞台、映画等のヴィジュアル・アートのために、多くの音楽を演奏してきた。不吉で重厚い音の重なりは、まさに視覚的喚起力を持って我々に迫ってくるはずだ。

考えてみれば、このような前衛音楽と無声映画の出会いには、映画を生んだ国フランスのお家業かも知れない。ジガ・ヴェルトフの「カメラを保持した」アンドロム、ミュージカル・アンスタク、マルセル・ルビエの「人である」など、いさよア、シャル・ヴェルナルの「夜」こと、レイス・ウラリス、etc. 少し思い出してみただけで、こういって刺激的な出会いを幾つも教唆し上げることができ、筆者などは、1970年代、1970年代、「ノス・エラト」かつ「アークの大学生」の、このように上映会をハジけたことさもあるのだ。そして、その前者の音楽担当が、まさにこのアール・ゾイドだった。その映像と音との思いがけない技術の衝撃は、未だに忘れられない。今回、それを上回る衝撃を、必ずや彼らに与えてくれることだろう。この映像と音との「不純な」錬金術に、大いに期待しようではないか。



■大澤真司 Toshiharu Ozato  
 1958年、岐阜生まれ。早稲田大学文学部卒業後、1980年、早稲田大学大学院で映画学を専攻。現在、埼玉県大宮市在住。大宮市立大宮高等学校教諭。30代後半からミュージック・シーンでの活動が、研究対象としてのエッセイを著している。最近では、大澤真司の著書『不純な楽しみ』を著している。